

1992.11.24

奈良国立文化財研究所
飛鳥藤原宮跡発掘調査部

1. 発掘調査について

調査次数：藤原宮第70次調査

調査地：奈良県橿原市醍醐町菰田5・6

調査契機：奈良国立文化財研究所による計画調査

調査機関：奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部

調査期間：1992年9月30日から11月末終了予定

調査面積：約800㎡

発見遺構：掘立柱塀（内裏外郭塀）2、南北溝1、東西溝1、宮内先行条坊側溝2、橋1、堰および池状の広がりなど。

近隣調査：藤原宮第11次調査（昭和49年）飛鳥藤原宮発掘調査概報5

2. 発掘遺構について

藤原宮期の遺構

掘立柱塀：内裏外郭の西面および南面を限る掘立柱の一本柱塀

柱間＝約3m（10尺）、柱掘形一辺1.2m

南北塀（西を限る塀）4間分、東西塀（南を限る塀）1間分

西大溝：南から北に流れる宮内の基幹排水路の一つ（今回29m分を発掘）。上幅約4m、下幅0.9～2.5m。深さ1.2～1.8m

橋：「西大溝」に架けられた橋。掘立柱の橋脚が残る。規模は東西2間（3.2m）、南北2間（2.6m）。

堰および池状の広がり：橋の南約6mの位置に石や杭で築いた堰があり、それより上流（南）側の両岸が池状に広がる。東西幅15m、南北長8m以上。

東西溝：堰の付近に西から流れ込む東西溝。幅1m弱。深さ30cm

藤原宮期直前の遺構

先行四条大路の南北の側溝：いずれも幅70cm、深さ10cmほど。溝心心間約15m。ただし、南側溝の西半は藤原宮期の東西溝で掘り直し。

なおこの他に、水田耕作に伴うとみられる中世の小溝が多数ある。

3. 出土遺物について

西大溝および池状の広がり内の堆積土中から、以下の遺物が出土した。

木簡：荷札および釘に関する文書木簡など11点。（釈文は別紙）

瓦類：多数の軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦。他に面戸（めんど）瓦、熨斗（のし）瓦、谷樋（たにどい）瓦など。これらの瓦類は、内裏外郭の西面および南面塀に葺かれていたとみられる

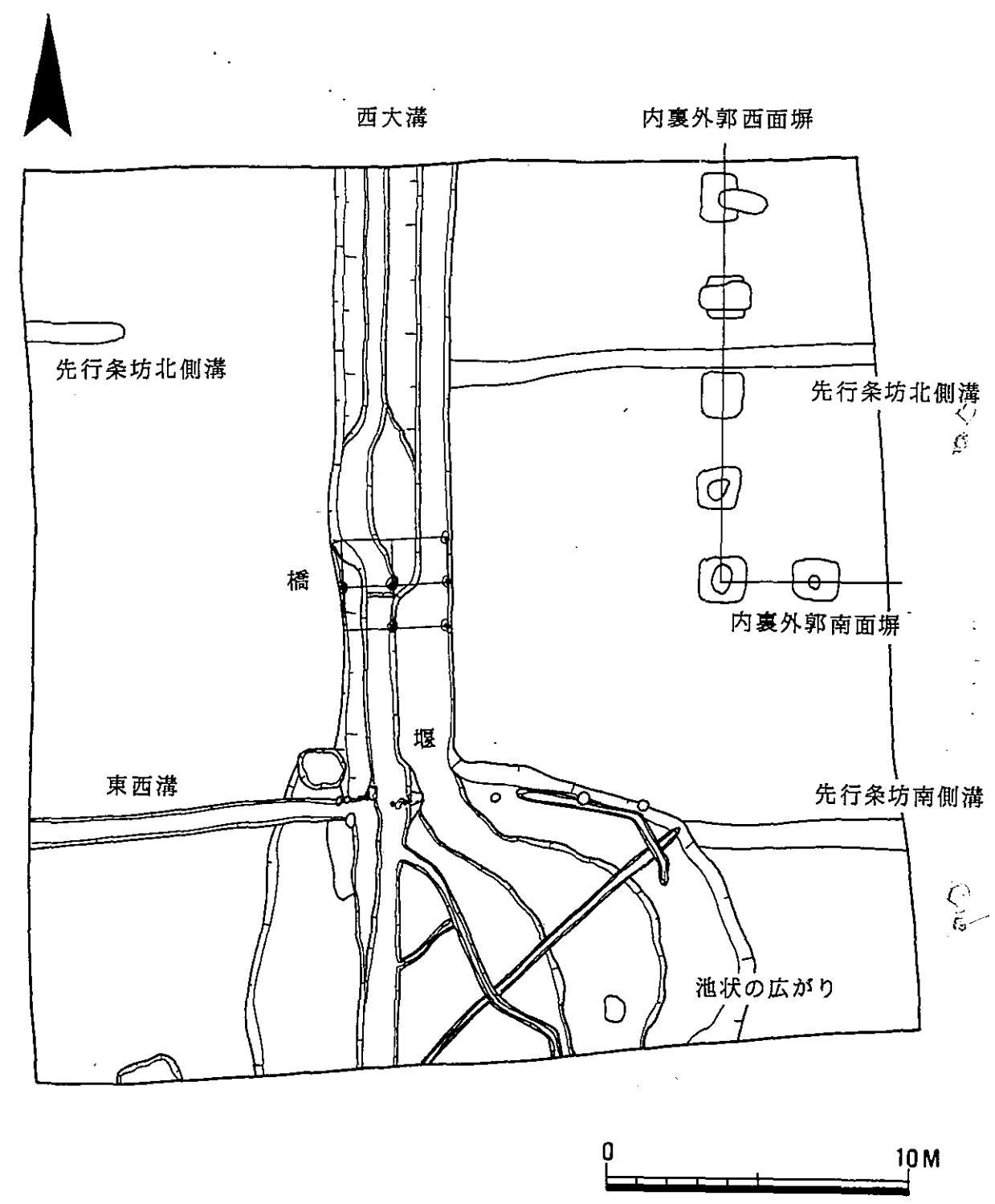
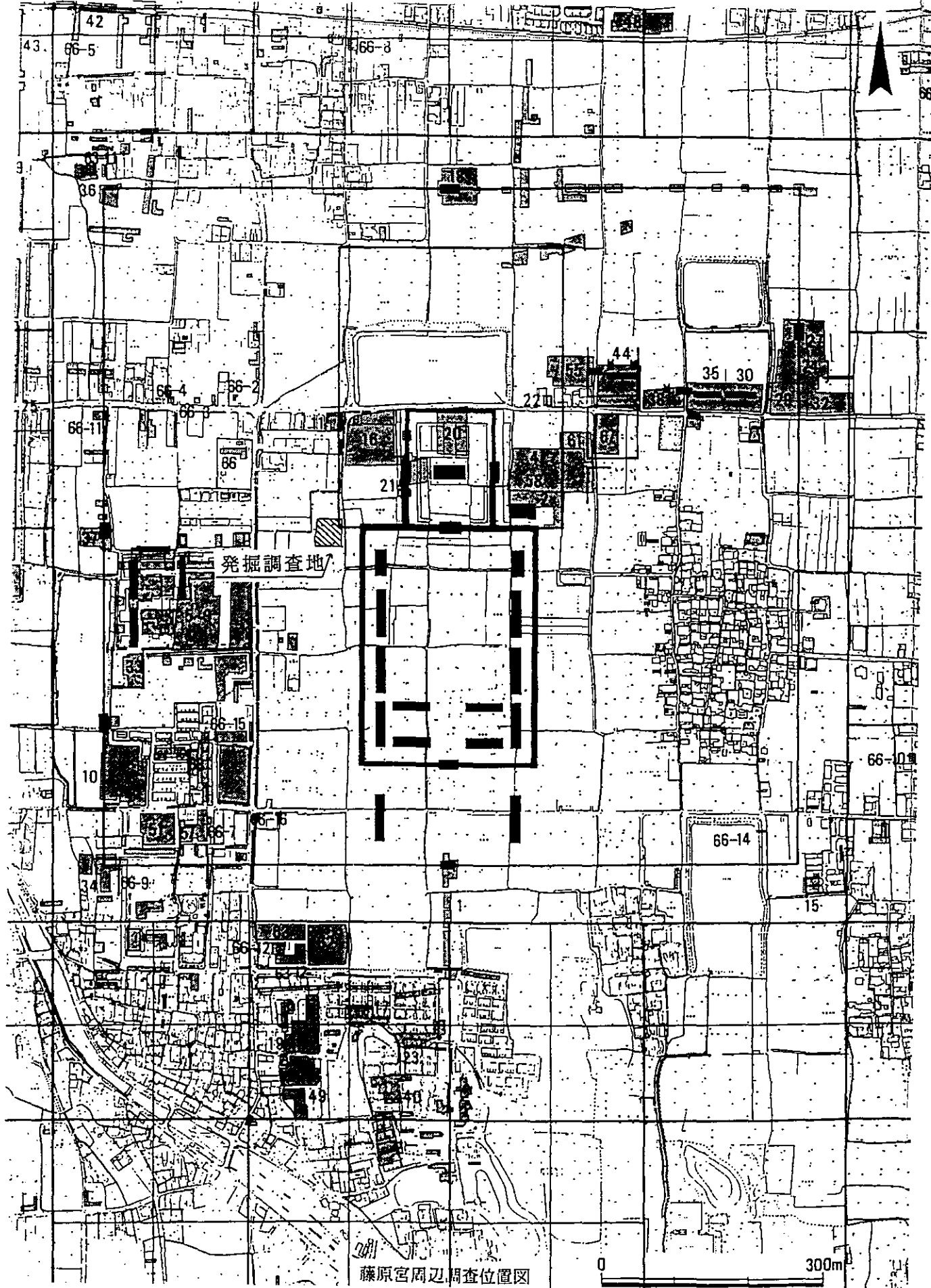
土器類：土師器、須恵器、土馬（土師質）、円面硯など

石製品：砥石など

木器：曲物底板など

4. まとめ

- ① 内裏外郭塀のうち、南面の塀を今回初めて確認した。内裏外郭南面塀は、宮の南北2等分の位置にあたり、先行四条大路の道路心とも一致する。なおこの南面塀は、東へ30mほどのびて朝堂院回廊の西北隅にとりつく。
- ② 今回の調査により、初めて内裏外郭塀の西南隅の位置が確定し、内裏外郭の規模（東西幅303m、南北長378m）が判明した。
- ③ 先行条坊側溝を再利用した東西溝や西大溝に架かる橋を検出し、宮の南北2等分線上を通る宮内道路の存在が復原できた。
- ④ 西大溝が、途中で池状の広がりを伴うことが初めて確認された。堰の存在から、貯水機能をもつ人工的な池であることは判るが、その性格については、今後の上流側の調査を待って決めたい。
- ⑤ 西大溝や池状の広がりの埋め立てに大量の瓦類が捨て込まれており、内裏外郭塀に瓦が葺かれていたこと、その瓦が大極殿朝堂院地区に用いられた瓦と同様であることも判明した。



藤原宮第70次発掘調査遺構図

西大溝SD一六八〇出土木簡帛文

・十一日打相釘九十四隻 吳釘六百九十隻 □

287×27×5 011

・枚金□□其釘廿七須理釘廿六 折四 □□卅四

・遠江國濱名日下部名□

(158)×29×2 019

「 菰作一口 □七 〔定カ〕

・十上廣田列十之中日置造出一口

□守一口 □ 〔船カ〕

綾郡山本里宇遲マ首

142×28×6 032